

5 山で働く

木を切る

チェーンソーが登場する昭和30年代までは斧と鋸で木を切り倒していました。木の高さ、枝張り、地形などから切り倒す向きを決め、倒す方に斧で三角の切り込みを入れます。次に反対側から斧や鋸を入れ切り倒します。鋸で切るときは木の重みで鋸が動かなくなるのを防ぐため矢を打ち込みました。

切り倒したら鉋などで枝を落とし、必要に応じてタマギリといって寸法に合わせて切り分けます。

木を運ぶ

山から木を降ろすには、そのまま斜面を滑らせ、谷川に流すことが多かったのですが、川がなければ、切り口にかん環を打ち込み、綱を付けて人や牛馬が引っ張ったり、木馬と呼ばれるそりに積んで、丸太を並べた道を作り滑らせたりしました。丸太を転がしたり、少し動かす時には、とびくち鷹口やつる鉤、まんりきづめ万力爪を使いました。

板にする

丸太のまま使うものもありますが、多くは角材や板に加工されます。皮剥で木の皮をはぎ取ったら墨打ちといってどのように切り分けるか墨糸で線を引き、おが大鋸という大きな鋸で縦に挽き切り、斧やなた鉋、ちょうな手斧で削って仕上げます。熟練の技が必要でした。

木を育てる

植林にはスギやヒノキ等の針葉樹が用いられます。3月から4月頃、植林する場所の雑木や雑草を払い、山鋤で土を起こし苗を植えます。背の低い内は雑草に覆われないよう鎌で雑草の下刈りをします。

木がある程度生長したら、日当たりと風通しを良くするために、枝打ちといって下枝を落とします。10年目と20年目に生長の良くない木を間伐します。スギは植えてから材木として切るまで30年以上かかります。真っ直ぐに育った美しい木を作るためには大変な労力が必要です。



切 斧 (きりよき)

木を切り倒す時に使われる斧です。まず切り倒したい方の根本にこの斧で切り込みを入れ、反対側からこの斧または山鋸で切り込んで倒しました。



山 鋸 (やまのこ)

木を切り倒したり、タマガリの時など山仕事で用いられる鋸です。これで直径四尺(約120cm)の木まで切ることができます。



改良鋸 (かいりょうのこ)

従来の山鋸は木を切る時、おがくずで目詰まりしやすかったので、歯の間に大きなすき間を入れて、おがくずが排出されやすいように改良された鋸です。



矢 (や)

木を切る時に切り口に打ち込んで、切り倒す方向を調節したり、鋸を挽きやすいようにすき間をつくったりする道具です。



鉞 (なた)

切った木の枝を落としたり、植林した木の手入れで余分な枝を落とす枝打ちの他、藪を払ったり、小木や竹を伐ったりと、山仕事で幅広く使われていました。



鑿 (かん)

切り倒した木材を山から引き下ろす時など、長距離を移動させる時に、木材に楔部分を打ち込んで固定し、輪部分に綱などをつけて引いて運びました。



鉤（つる）

丸太を動かすときに、この道具の金具の先端に丸太の下に差し込み枕木を当て、梃子にして木を転がしました。土佐（高知県）で生まれた道具で土佐鉤とも呼ばれます。



鳶口（とびぐち）

丸太を動かすときに、この道具の金具先端を木材に打ち込んで引いたり、先端を木下に差し込み梃子にして木材を転がしたりして運びました。



万力爪（まんりきづめ）

丸太を動かすときに、^{かぎ}鉤状の刃先を木を打ち込み、鉄輪に硬い棒を入れ、梃子の要領で浮かせて転がしました。



皮剥（かわむき）

カワハギともいいます。切り倒した木の樹皮をはぎ取る道具です。貯木するとき樹皮がついたままではしめりやすく、虫が発生し木を傷めるので皮を剥きました。



皮剥（かわむき）

カワハギともいいます。杉や檜の皮は屋根や壁の材料となっていました。樹皮を材料として採る場合はこのようなへらを差し込んで、大きくきれいに樹皮を剥きました。



削斧（はつりよき）

山から切り出した木を製材して角材を作るとき、平面になるように削る斧です。

植林のこと

森林面積の広い我が国にはさまざまな樹木がありますが、とくにスギ・ヒノキは建築用材として、また、松は燃料として古くから利用されてきました。

初めの頃は、天然林の中から必要な樹木を探して伐採し利用していました。しかし、建築材、燃料のほぼ全てを樹木に頼っていたわが国では中世には森林資源が不足してきました。そこで江戸時代になると全国各地で植林が行われるようになります。

木材の運搬に水運を主に利用していたことから、特に大きな河川の中上流域に林業が発展していきました。その中でも大和（現奈良県）の吉野川上流域や、信州（現長野県）の木曾川上流域、紀州（現和歌山県）、土佐（現高知県）などは林業の先進地でした。明治時代以降になると、これらの地域の技術者たちが全国へ渡り、また全国からこれらの地へ技術を学びに訪れるようになり、技術が全国へ広まり林業が発展していきました。

第二次世界大戦後、木材需要が急増したこともあり、昭和30年代から40年代に拡大造林といって全国の山で大規模な植林が行われ、やがて林野の四割が人工林という世界有数の水準にまで達しました。

しかし、拡大造林の頃に植林された山はもう伐採期に入っていますが荒れたまま放置されているところも少なくありません。それは安い輸入材により林業経営が苦しくなり、山を離れる人も増え、山村の過疎化、高齢化が急速に進んだためです。スギやヒノキなどの針葉樹はもともと根張りが弱いのですが、間伐や枝打ちなど山の手入れが十分行われていない森は地面に日が当たらず下草も生えないため、更に保水力が低下しています。このことは、斜面の崩壊や水の涵養力低下などの一因とも考えられています。また、大きく育ったスギやヒノキからは毎年大量の花粉の飛ばし、アレルギーの原因となっています。私たちひとりひとりが身近な環境問題として山の環境を考える時代となっています。



大鋸（おが）

板を切り出すために、丸太を縦に切る鋸のこぎりです。ワキノコ、コビキノコなどとも呼ばれます。鋸を挽いて出る木くずをオガクズというのはここからきています。



手斧（ちょうな）

山から切り出した木を製材して角材を作るとき、削斧はつりよきである程度平らに削った後の仕上げをこれで行いました。



鎌（かま）

草刈り用の鎌です。杉などの苗木を植えてすぐの頃は、下草刈りといって、苗木が周辺の草に埋もれてしまわないように、定期的な草刈りが必要です。



造林鎌（ぞうりんがま）

林業専用につくられた鎌です。普通の草刈り鎌より刃が厚く、下草を刈るほか、細い木や枝を切り払うこともできます。

6 海や川で働く



大漁で賑わう港 熊本市 1964年 白石巖撮影

四方を海に囲まれ、多くの河川が流れる我が国では、魚や貝は重要なタンパク源として古くから利用されてきました。縄文時代の遺跡からは石や骨角で作った釣針が見つっています。また、古代の文献には葛で編んだ網で魚を捕っていたことが記されています。

漁は自然を相手とするものですから、漁師は経験や観察から多くの知恵を貯え、潮の動きや生き物の習性を巧みに利用して、狙った獲物を効率よく捕らえられるよう、道具や漁法の改良を重ねてきました。そのため日本全国には何百種類もの漁法があります。漁具を用いず魚をつかみ取る素朴なものから、ホコやヤスで突く方法、竹で作った籠かごを被せて捕る方法、ウナギやタコなど穴に隠れる獲物を鉤で引っかける方法、餌を入れた籠うけや釜かまを沈めておく方法、海岸に石垣を築き干潮時に取り残された魚を捕る石干見漁いしひみりょうなど数えだしたらきりがありません。このようなさまざまな漁法の中で中心となるのは釣漁と網漁です。しかし、一口に釣漁と言っても疑似餌を使うものやアユのように罟つりりょうを使うものもあり、またカツオのように竿で一本釣りするものからマグロのように何百メートルもの縄に多数の釣針をつけて漁船で流すものまでさまざまなものがあります。網漁もまた、一人でも出来る投網や四手網、船と多数の人が必要な地引き網、網を海の中に張っておいて獲物が入るのを待つ建網、船団を組んで行う八田網はったあみなどさまざまなものがあります。

明治23年に出された「熊本県漁業誌」と言う本を見るとその頃、釣漁で20種、網漁で58種、その他の漁法を入れると100種類以上の漁法が紹介されています。

しかし、戦後の技術革新により漁のあり方が大きく変わりました。特に、船の大型化や動力化が進んだこと、麻などを使っていた網が丈夫な化学繊維で大きな網に変わったこと、魚群探知機によって勘や経験に頼らずに獲物を探し出せるようになったことなどが大きな変化です。これらの技術革新は一時的には漁獲の増大をもたらしましたが、海の環境の悪化とあいまって漁業資源の枯渇という問題を引き起こしました。その後、漁業は捕る漁業から育てる漁業へと変革しました。



魚伏籠（うおふせかご）

川や池、干潟などで、魚がいる場所に被せて、上部の口から手を入れてつかみ取る道具です。この籠を県内ではウザといい、漁法はウザ突きなどと呼ばれます。



筥（うけ）

県内ではガネテゴなどと呼ばれる川蟹を捕る道具です。籠の中に小魚の頭などの餌を入れて一晩川に沈めておきます。餌を食べに入った蟹が出られないようになっています。



筥（うけ）

川でウナギを捕る道具で、県内ではウナギテボなどと呼ばれます。中に餌を入れて川に仕掛けます。円錐状のカエシによって、中に入ったウナギが出られない仕組みになっています。



鰻搔（うなぎかき）

川の下流域から海岸近くの海で、川岸や石垣、干潟の泥の中などにいるウナギを引っかけて捕る道具です。



やす

魚を突いて捕る道具です。夜間に明かりを持って川や海にいき、眠ったようにじっとしている魚を突き捕るヨギリなども盛んでした。



鋤簾（じょれん）

干潟のハマグリ・アサリを掘り捕る道具です。ベルトを腰に巻いて鎖で籠とつなぎ、棒を肩に担いで後ろ向きに引きます。この漁法は県内ではヨイショ漁と呼ばれ、緑川河口付近で行われています。



さで網（さであみ）

木の枝を曲げた枠に網を張ったものです。タビ、タブなどと呼ばれます。これで川や井手などで魚をすくいとっていました。



魚籠（びく）

捕った魚を入れる籠です。魚が弱らないように、長い紐をつけて水に沈めていました。



糸巻（いとまき）

釣糸を巻きつけておく枠です。枠が回転するよう工夫されています。一本の糸と針で行う一本釣りは太古から行われてきた漁法です。単純なだけに、熟練を要します。



蛸壺（たこつぼ）

タコが穴の中に潜む習性を利用したもので、この壺を数日海に沈め、中に入っているタコを捕ります。小型のタコを捕るには貝殻なども利用されます。

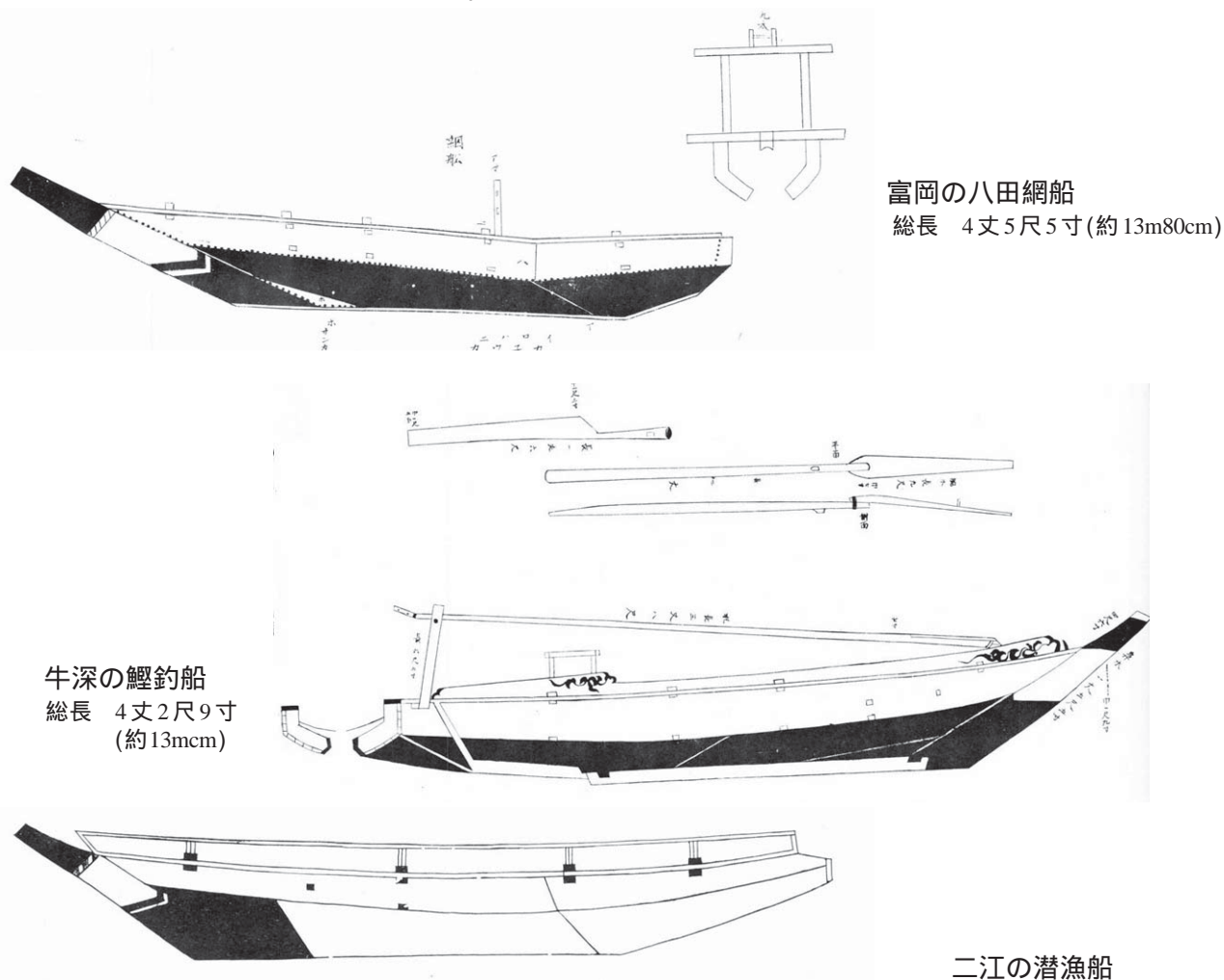
漁船のこと

沿岸漁業の主な漁法は江戸時代の末までに開発され漁法としてはすでに完成期を迎えています。しかし、明治初期ごろには当時の低い技術水準のもとでは漁業生産量の伸び悩み、頭打ち状態に入ってきていたとみられます。そこで明治時代は更に新しい漁業技術の模索を最大の課題にしていました。方向としてはより広い漁場をより高能率に利用できる、沖合操業の方向が目指されました。そのためには漁船の改良が不可欠となります。

ところで、船の作り方が西洋と日本では大きく異なっています。キール（竜骨）を背骨にして人間の骨格のように肋骨（ろっこつ）を組み、外板をはり付けるの西洋式の船に対して、丸木船から発展した和船（日本の在来技術で造られた船）には、基本的に骨組みがありません。カワラと呼ばれる底板に数枚の板を曲げてつなぎ合わせ、横方向に固定するのが特徴です。

明治中期には、政府は漁船改良の方法として、在来の漁船の中でとくに優良なものを発見し、それを全国に普及させ、また西洋型漁船の長所を採り入れた改良なども考えていたようです。熊本県では明治23年に「熊本県漁業誌」を編纂していますが、その中で堅牢かつ軽捷で遠洋の波濤に耐え安全に操業できる船として富岡町（現苓北町富岡）の八田網船、牛深村（現天草市牛深町）の鰹釣船、二江村（現天草市五和町）の潜漁船の三種をあげています。

昭和30年代にFRP（繊維強化プラスチック）船が登場します。軽く、堅牢で安価なFRPの利用は戦後の船材革命ともいわれ、従来の木造漁船は急速に減少し、近頃ではほとんど目にすることが無くなりました。





餌木（えぎ）

イカ釣りに用いられる、魚やエビの形をした木製の疑似餌です。素材や色、形にさまざまな工夫をこらして手作りされていました。



擬餌鉤（ぎじばり）

カツオ一本釣り用の擬餌鉤です。サビキとかシャブキと呼ばれています。各漁師が貝や骨、珊瑚などさまざまな材料で手作りしていました。



擬餌鉤（ぎじばり）

県内でホ口と呼ばれる擬餌鉤です。長い釣系の先にこれをつけ、船で曳いて餌のようにみせ、カツオ、ブリ、サワラ、シイラなどを釣るホ口曳漁で使われます。



枕箱（まくらばこ）

漁師が漁道具を入れて持ち運ぶ道具箱です。漁の途中で休むときに枕として使っていたことが名前の由来と言われます。天草市の牛深ではカルタと呼ばれていました。

7 ものを作る



桶を作る 熊本市 1985年 白石巖撮影

職人とは

人々は生活や生産にあわせてさまざまな道具を作り出してきました。多くの道具は元々は使い手が自ら作っていました。もちろん、金属の加工など特別な技術を必要とするものもあります。このような特別な技能を必要とする分野では古代から職能集団が形成されていたようです。中世になると職人という言葉が文献に出てきます。当時の職人という言葉は、現在より広い概念を指す言葉で、手工業者だけではなく、芸能民、宗教者など土地に依存せず特定の技術で生活している人々を広く指したようです。この頃の職人の特徴は職能ごとに集団を形成して、天皇家や有力公家、大寺院などに職能により奉仕する一方、農民が負担する課役は免除され、全国を自由に通行する特権が認められていました。戦国時代になると職業の分化が進み、手工業者のみを職人と呼ぶように変わりました。江戸時代になると職人は都市部に集められ、城下町では職種ごとに一定地域の集住させ職人町を形成しました。

職人は大きく分けて自宅を仕事場とする居職と、道具を持って周り、頼まれたところで仕事をする出職に分かれます。いずれにしても職人の社会は親方、平職人、弟子という階層を持つ徒弟制がとられました。弟子の間は年季が明けるまで原則無給で、お仕着せや小遣いが与えられるだけでした。年季が明けても親方との主従関係は終生続きました。大工や左官、桶屋などは聖徳太子、鋳物師や鍛冶屋は金屋子神、石屋は山ノ神など職種ごとの職能神を集まって祀る講が組織されました。講の構成員は親方に限られており、その場で価格や賃金などの協定も結ばれました。

明治時代になり物作りの場の多くが工場に移行しますが、そこで働くものは職工とよばれ、職人という言葉は伝統的な手工業者のみを指すようになりました。



石工道具（いしくどうぐ）

石工とは山から石を切り出したり、橋や石垣などを築いたり、石仏など石に細工したりする職人です。

この道具は主に石垣などを築いていた石工が使っていたものです。石に矢を打ち込んで目的の大きさに割り、槌で石の角を打ち削ってあらかた形を整え、最後はのみで削って仕上げます。のみは荒削り・底削り・仕上げ調整など、用途によって使い分けます。



左官道具（さかんどうぐ）

左官は主に壁を塗る職人です。かつての日本の家の壁は土で塗られていました。素材は土、砂、わら、竹、ふのり、石灰（こて）などです。これらを塗りの段階（下塗・中塗・上塗）や塗る場所などに応じて配合し、鏝で均一に平らに塗ります。



桶屋道具（おけやどうぐ）

桶の材料は木の板と竹です。木はヒノキ、サワラ、スギなどが用いられます。アラワリという鉋なたで割って丸太から板を取り出し、作る桶の直径に合わせて桶型で外側の丸みと側面の角度を計り、板を腹板はらいたに当て、桶の内側をウチセン、外側をソトセンで削って湾曲した板を作ります。この板を桶の形に丸く並べ合わせて仮留めをし、内と外を鉋かなで削って仕上げます。竹ひごを桶の直径より小さく編んでタガを作り、ワジメという木を当てて木槌で叩いたり、へらで押し込んだりしてはめ込みます。罫引けびきで底板の位置を決めてその直径を計り、底板を丸く切り取り槍鉋やりがんなやセンで仕上げます。一枚の板で底を作れないときは、何枚かの板の側面にソコイタヌキというやや太めの錐きりで穴をあけて木釘・竹釘をさしてつなぎます。持ち手などに穴を空けるときにはノミみつまたぎりや三又錐で穴をあけます。

8 運ぶ・はかる



メゴで荷物を運ぶ女性 1967年 白石巖撮影

昔から暮らすため、仕事をするためには、ものを運ぶ、ものをはかるということは不可欠のことでした。

かつては人の力だけで運ぶことが多く、少ない力で多くのものを運ぶことが出来るよう、運ぶものに合わせてさまざまな道具が工夫されてきました。

一番簡単なのは手に持って運ぶことですが、それ以外

で広く行われているのは肩に担ぐ方法と背に負う方法です。担いで運ぶ道具の代表は長い棒です。土石を入れた畚もっこなど重いものは、それを下げた棒を二人で担いで運びます。一人で担ぐ天秤棒てんびんぼうは両端に桶かこや籠かごなどを下げて使いました。背負う道具には背負梯子せおいばしこや背負籠などがあります。荷物が安定し、両手が使えるという利点から、背負う道具は特に長距離を移動する場面や山仕事などで使われていました。

はかるということは人とものを売り買いするときなど社会的な場面で特に重要でした。現在、米は5kgとか10kgといった単位で売られていますが、ご飯を炊くときには計量カップで1合、2合とはかっています。

今、日本ではものをはかるときにメートル法とって、長さはメートル、重さはグラム、容積はリットルを基本単位とする国際的に統一された単位を使っています。しかし昔は尺貫法とって長さは「尺」(30.3cm)、重さは「貫」(3.75kg)、容積は「升」(1.8升)を基本単位とする日本独自の単位を使っていました。その名残りが米をはかるときに残っているのです。ちなみに「合」は「升」の十分の一の単位です。

尺貫法の名残は他にも五寸釘、しゃくとり虫、巻尺、食パン一斤、花いちもんめ、一升瓶、一斗樽など、暮らしの中にまだまだたくさん残っています。しかし、メートル法に慣れた私たちにはそれがどのくらいのものなのか見当がつかなくなっています。



背負梯子で荷物を運ぶ女性
天草市栖本町 1975年 白石巖撮影



背負梯子（せおいばしご）

荷物を背中に負って運ぶための道具です。阿蘇地方などではオイコ、球磨地方などではカライなどと呼ばれます。



籠（かご）

これは主に農作物を運ぶのに使われていた籠です。県内ではメゴと呼ぶことが多いようです。天秤棒てんびんぼうの両端に提げて運びました。



背負籠（せおいかご）

これは主に山仕事かこの道具を入れて運んでいた籠です。ツツラで編まれています。ツツラテゴ、ツツラカガイなどと呼ばれていました。

お買い物は籠を持って



魚籠を持って朝市で買い物 八代市日奈久町 1967年 白石巖撮影

買い物も昔と今ではずいぶん変わりました。今はスーパーマーケットで好きな品物を自分で選んでレジでお金を払います。肉でも魚でも重さと値段が書かれたシールが貼ってあります。昔はお店や行商の人と話ながら買うものを決め、その場で重さや量をはかってもらい買い物をしました。

ところで、「マイバッグ運動」ってご存じですか？ 買い物に行ったときに自分の袋や鞆に買った物を入れて、レジ袋をもらわないという運動です。少しでも地球環境に優しい、エコロジカルな暮らしがいいですね。

今は野菜でも肉でも魚でも、プラスチックのトレイに乗り、ラップで包装されています。ちょっと昔はその場で重さをはかって八百屋さんの包装紙は新聞紙。お肉屋さんには竹の皮で肉を包んでくれました。レジ袋なんてありませんからマイバッグは当たり前。

昔の暮らしは大変でした。便利なことはみんな大好きです。でも、昔の暮らしを見直して、今の暮らしを改めた方がいいところもたくさんあるかもしれません。



畚（もっこ）

土や石などを運ぶのに使われた道具です。縄などを編んで網状にし四隅に紐をつけたもので、天秤棒につるして担ぎました。



買い物籠（かいものかご）

竹製の四角い蓋付きの籠は戦前から使われていたもので、豆腐などを買うときに用いられていました。藤製およびビニールを巻いた針金で編んだものは昭和30～40年代に使われていました。



枡（ます）

穀物や粉類、液体などの分量をはかる道具です。基準となるのは一升（約1.8ℓ）枡で、その10分の1が一合枡です。写真は大きい方から一升枡、五合枡、二合五勺枡、一合枡です。



斗枡と斗棒（とますととぼう）

斗枡は一斗（約18ℓ）をはかる用具です。かつては角形でしたが、大正時代よりこのような丸い桶型のものが作られました。

斗棒は斗枡上の余分な盛り上がりを掻き均す道具です。県内ではトボと呼ばれます。男性は88歳になると斗棒を作って配り長寿を祝う風習がありました。



棹秤（さおばかり）

熊本県内ではチキリとよばれます。棹秤は艇子の原理を用いて物の重さをはかる道具です。貴金属などをはかる小型のものから米俵などをはかる大型のものまで各種ありました。魚などをはかる受け皿を吊したものもありました。

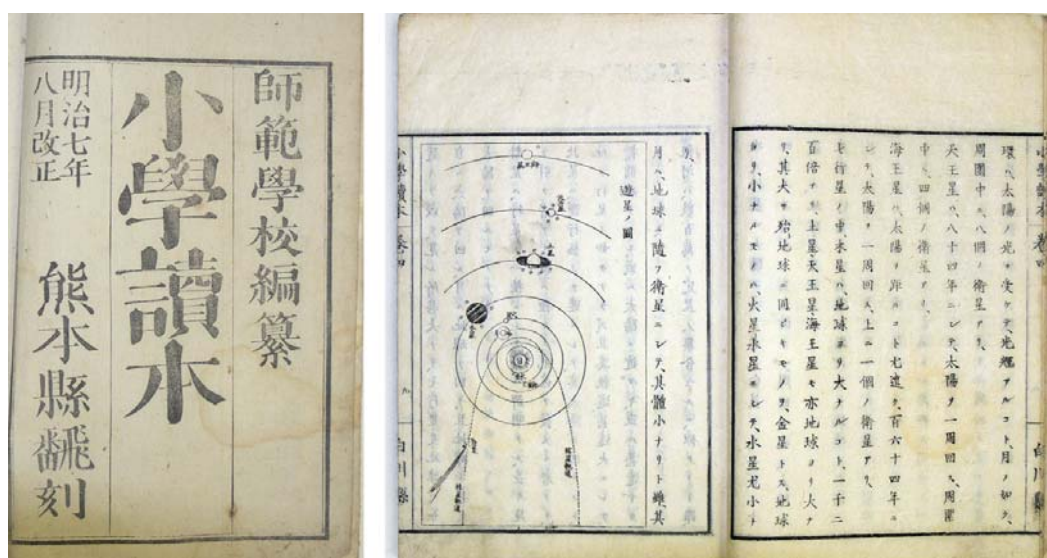
9 昔の小学校

日本に現在の学校教育の基になる学制（学校の制度）ができたのは明治5年(1872年)です。小学校は尋常小学校と呼ばれ、下等小学4年、上等小学4年の2段階編成でした。明治8年(1875年)には学齢（学校に通う年齢）が満6才から14才と決められました。しかし、すべての子どもが小学校に行ったわけではなく、就学率は明治10年(1877年)ごろで40%程度でした。その後、制度の改定が何度か行われますが、明治33年(1900年)に尋常小学校は4年の無償の義務教育となりさらに、明治40年(1907年)には尋常小学校は今と同じ6年に延長されました。この年の就学率は97%に達しています。

昭和16年(1941年)に尋常小学校は国民学校と改称され、小学校教育も戦時教育の色合いを濃くしていきます。

終戦後、教育の民主化のため学制改革が行われ、昭和22年(1947年)以降、義務教育は小学校6年、中学校3年となり現在に至っています。昭和38年(1963年)以降は義務教育の教科書は無償で配付されるようになりました。

それでは小学校ではどんな教科を習っていたのでしょうか。明治14年(1881年)の小学校の教科を見てみると、この頃は初等科3年、中等科3年、高等科2年となっていますが、初等科で修身、読書、習字、算術、唱歌、体操。中等科ではこれに加えて地理、歴史、図画、博物、物理、裁縫（女子のみ）、高等科では更に科学、生理、幾何、経済（女子は家事経済）となっています。国民学校では国民科（修身、国語、国史、地理）、理数科（算数、理科）、体錬科（体操、武道）、芸能科（音楽、習字、図画、工作 裁縫（女子のみ））となっています。



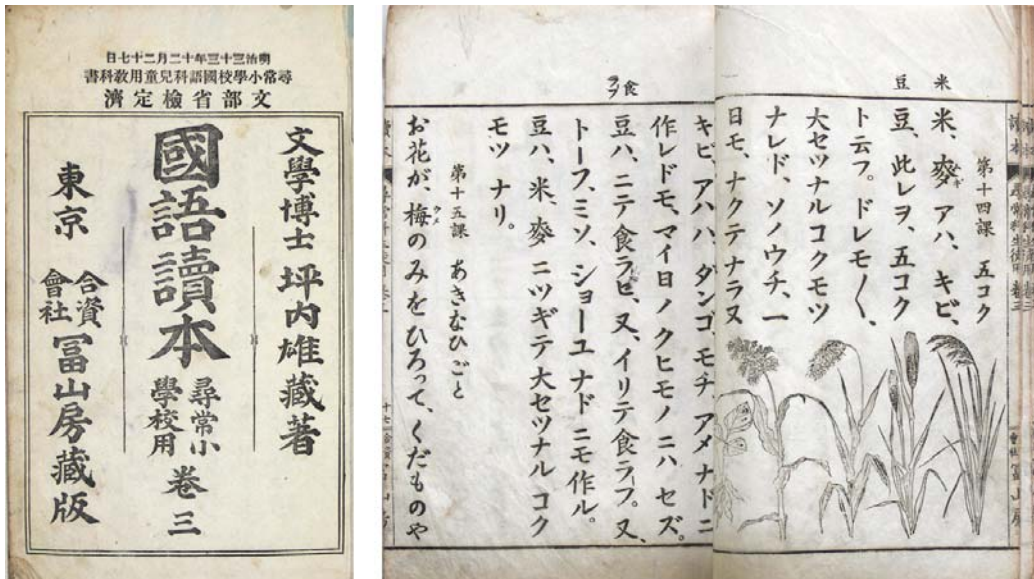
小学読本巻四（しょうがくとくほんまきよん）

小学校の制度が出来て間もない明治8年に東京の師範学校が作った読本の教科書です。太陽系のこと、空気や光の性質など科学的な内容になっています。



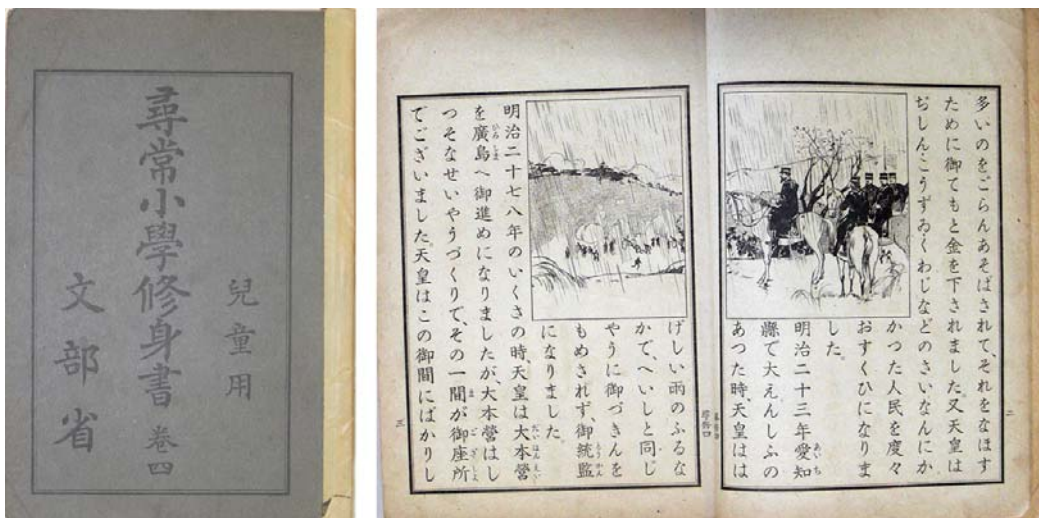
小学唱歌第三編（しょうがくしょうかだいさんぺん）

明治18年に文部省音楽取調掛が編纂した唱歌の教科書で、小学校、師範学校、中学校用教科書と書かれています。今も卒業式で歌われる「揚げば尊し」などが載っています。



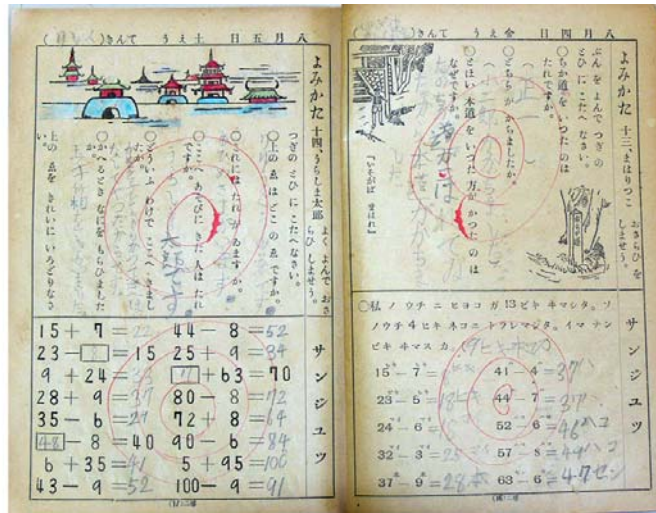
国語読本尋常小学校用卷三（こくごどくほんじんじょうしょうがっこうようまきさん）

明治33年の尋常小学校の国語の教科書です。発行は富山房で文部省検定とあります。現在カタカナは外来語などにしか使いませんが、現在なら平仮名を使うところにもカタカナが使われています。



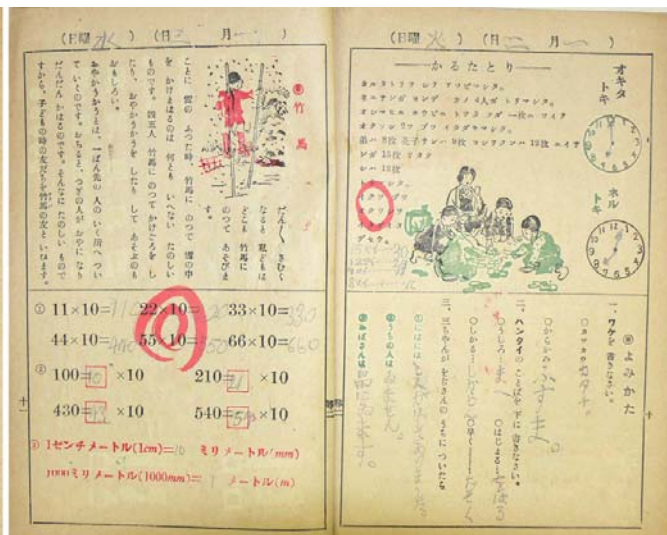
尋常小学修身書卷四（じんじょうしょうがくしゅうしんしょまきよん）

大正9年に文部省が発行した修身の教科書です。最初に教育勅語が掲載されています。教科書の内容も教育勅語にそって、皇室を敬うこと、親に孝行し、兄弟仲良くすることなど、体を鍛えることなどを教える内容になっています。



ナツヤスミノトモ

昭和8年に熊本師範学校が尋常小学校2年生用に作った夏休みの宿題帳です。7月21日から8月31日まで毎日1ページずつやるようになっていています。読み方、書き方、算術、修身などが出題されています。



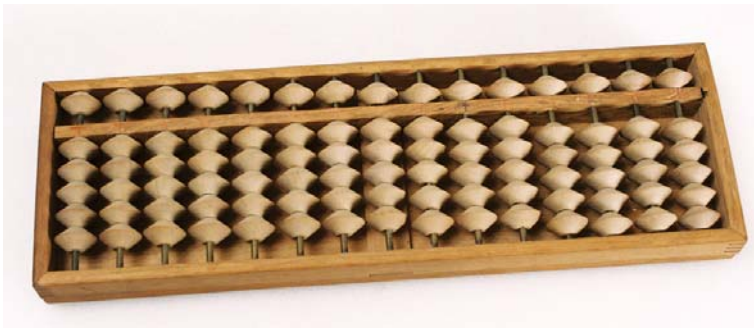
冬やすみれんしゅう帖 (ふゆやすみれんしゅうちょう)

昭和8年に熊本師範学校が尋常小学校2年生用に作った冬休みの宿題帳です。赤や緑のインクも使われています。



石版 (せきばん)

これは明治30年代のものです。何度も書いたり消したり出来るので、これを使って字の練習などをしたそうです。



算盤（そろばん）

現在は計算に算盤を使うことは少なくなり、学校でもあまり使いませんが、昔は複雑な計算には普通算盤を使いました。これは五つ珠と言って今の算盤より珠が一つ多い昔の算盤です。



足踏オルガン（あしづみおるがん）

昭和30年代前半の足でペダルを踏んで風を送り音を出すオルガンです。昔の学校には必ずこのようなオルガンがありました。昭和40年代になり電気オルガンが普及し見かけなくなりました。

10 展示資料一覧

(法量の単位：cm)

1 台所今昔

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
羽釜	ハガマ	八代市鏡町上鏡	22.5×22.5×15.3	
火吹き竹	ヒオコシダケ フュジダケ	熊本県内	3×3×61	
渋うちわ	シブウチワ ウチワ	八代市鏡町上鏡	32.5×27×0.8	
七輪	シチリン	山鹿市鹿央町持松	26×26×23	
弦鍋	エナベ	玉名市横島町横島	33×36.5×40	昭和20～30年代
焙烙	ハウロク ハウラク	熊本市池田町	35.5×35.5×5.5k	
自在鉤	ジザイカギ ジゼカギ	球磨郡水上村湯山	5×32.5×97.5	
飯櫃	オヒツ、メシビツ	玉名市天水町部田見	27×27×15.5	昭和初期
飯櫃入れ	メシビツイレ、ヒツムロ	玉名市天水町部田見	34.5×34.5×23.5	昭和初期
飯籠	ツリショウケ カケジョウケ エッケジョウケ	玉名市横島町横島	40×40×30	大正後期～昭和30年代
保温ジャー	ジャー	玉名郡和水町江田	23×29×33	
電気炊飯器	スイハンキ	玉名郡和水町江田	31×37×28.5	
箱膳	ハコゼン	八代市	28×28×17	
膳	ソウワゼン	八代市鏡町上鏡	36×36×21 33×33×21 30×30×21	
ちゃぶ台		熊本市河内町	86×86×33	熊本市立熊本博物館所蔵
弁当箱	メンツ ワリゴ	阿蘇市波野	20×11.5×80	明治期～大正期
弁当箱	メシツギ メシオケ	上益城郡益城町小谷	14.6×22.7×16.8	明治期～昭和期
水筒	タカンポ ヨギリ	球磨郡球磨村神瀬	9.5×9.5×30	昭和20年～昭和25年
水樽	ユダル ミズタゴ	宇城市豊野町糸石	21.5×21.5×35.5	
提重箱	ワルゴ、サジキベントウ、ジウニンベントウ	玉名市岱明町開田	17.5×26.3×39.5	大正13年～
石臼	イシウス	阿蘇郡西原村小森	52×26×29	明治～大正まで
豆腐箱	トウフパコ	山鹿市鹿北町芋生	43.7×34×20	明治～昭和中期まで
甕	カメ	熊本県内	58×58×80	
醤油籠	ショウスノコ、ショウユメゴ、ショイカゴ	上益城郡山都町鎌野	28×28×66	明治期～
醤油攪拌棒	ショウユカキ、マゼボウ	阿蘇市三久保	16×12×75	大正期
醤油絞り器	ショウユシボリフネ、	玉名郡南関町関下	69.5×52×32	大正～昭和期
醤油甕	ショウユツボ、ショウユガメ	山鹿市鹿央町合里	34×35×38.5	明治～昭和初期まで
鯉節削り	カツオブシケズリ	天草市牛深町	34×17×12	
弁慶	ハザシ クシサシ	上益城郡御船町滝尾	6.5×6.5×56	
氷冷蔵庫		熊本市中島町	39.5×43×71	熊本市立熊本博物館所蔵

2 洗濯と裁縫

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
井戸の滑車	クルマキ、ミズアゲカッシャ	熊本市梶尾町	34×33.5×91	墨書「昭和貳拾六年九月 辻増平作」
釣瓶桶	ツルベオケ	阿蘇市西町	22×24×21	昭和18年～昭和25年
洗濯板	センタクイタ	熊本市稗田町	53.3×27×1.6	

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
盥	タライ	上天草市松島町阿村	61×61×28.7	熊本市立熊本博物館所蔵
伸子針	シンシバリ、シン	熊本市大江	直径1mm程度、長さ約40cm	
洗濯機	センタッキ	広島県庄原市	41×48×90.5	昭和33年製
宮参りの着物	ミヤマイリギモノ	八代市	身丈66 桁42	
仕事着	シゴトギ ハンギリ	玉名市横島町横島	身丈86 桁67	
ドンザ	ドンザ	天草市五和町二江	身丈130 桁60	大正5年～大正期
裁縫箱	サイホウバコ	熊本市大江	19.6×32×26	明治期
へら台		宮崎県日南市	38.5×171×4	
物差し	クジラジャク	熊本市大江	1.8×37.8×2	
紘け台	クケダイ	宇土市古城町	52×4×50.5	昭和期
足踏みミシン	ミシン	熊本市新大江	44×121×78	シンガー社製
火熨斗	ヒノシ ユノシ	熊本市和泉町	11.7×37×7.8	明治末～大正期
焼鏝	ヤキゴテ、ノシゴテ	八代市出町	35×3.1×3	昭和30年代まで使用
霧吹き		熊本市近見町	13.5×7×4	昭和32年～
炭火アイロン	ヒノシ、アイロン	玉名郡和水町江田	17×9.5×17.3	大正～昭和初期
電気アイロン	アイロン	熊本市琴平本町	19.8×10.3×12	ナショナル電気アイロン。箱書き「昭和参拾七年」
蓑	ミノ、カヤミノ	宇城市小川町南小川	97×70×5	
日蓑	ヒミノ、ヒマブリ	宇城市小川町南小川	106×67.2×1	
バッチョ笠	カサ、バッチョガサ	宇城市不知火町高良	51.5×51.5×11	
草鞋	ワラジ	下益城郡美里町小筵	25×8×1	
草履	ゾウリ、ワラゾウリ	熊本市梶尾町	19.7×10×1.5	
足半	アシナカ、アシナカゾウリ	下益城郡美里町小筵	15×7.3×1	

3 もっと暖かく もっと明るく

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
火鉢	ヒバチ	熊本県内	46×46×29	
炭入れ	スミタゴ	玉名市横島町横島	23.5×30×40	大正初期～昭和30年頃
十能	ジュウノウ	八代市鏡町上鏡	15.5×21.5×53	
火消し壺	ヒケシツボ	山鹿市鹿央町持松	25.5×25.5×21.5	
炬燵(櫓・火鉢)	コタツ、カカエコタツ	山鹿市志々岐	櫓38.5×38.5×31.5	明治期～昭和20年頃
行火	コタツ、アンカ	熊本市大江	13.3×22×16.8	
湯湯婆	ユタンポ	八代市鏡町上鏡	30×22.5×11	ブリキ製
湯湯婆	ユタンポ	熊本市大江	25.8×10×12	陶器製
電気行火	アンカ	熊本市近見町	25×12×3.5	昭和33年～
ひで鉢	ヒタキイシ、トボシ	阿蘇郡西原村小森	17.5×18.5×23.5	明治期
燭台	ロウソクタテ	八代市鏡町上鏡	22.5×22.5×74	
行灯	アンドン	八代市鏡町上鏡	29×29×93	
提灯	コトボシ、アンドン	葦北郡津奈木町岩城	19.2×19.2×43.8	昭和25年頃まで
提灯	ユミハリチョウチ	天草市牛深町牛深	25×25×48	
強盗	ガンドウ	八代市鏡町上鏡	24×24×34	
ランプ	ランプ	熊本市御幸	15×15×32	熊本市立熊本博物館所蔵
電灯		山鹿市菊鹿町	23×23×13	昭和30年代まで

4 田畑で働く

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
鍬	ヒゴグワ イタグワ	八代郡氷川町網道	48×13×51	明治～昭和初期
鍬	サンボングワ	熊本市近見町	37×16.5×107	昭和20年代から
鋤	スキ、ヒキテスキ	熊本県内	173×27×75	
二段耕犁	スキ	熊本市海路口町	115×156×110	大正～昭和 熊本市 の東洋社製 日の本 号
馬鍬	マガ	菊池郡菊陽町辛川	40×86×78	～昭和40年頃
塊割	クレワリ、クレシャギ	阿蘇郡西原村小森	26×6×89	大正時代
田下駄	タゲタ、アシダ	阿蘇市三久保	24×17×3	昭和初期～昭和30年 頃
踏車	ミズグルマ、スイシャ	宇城市三角町戸馳	200×51×158	
田植え綱	タウエヅナ	山鹿市菊鹿町木野	20×7×45	
田植え定規	タウエジョウギ、タウ エヨウワク、スジトリ	荒尾市大島	74×55×3	
肥桶	コエタゴ	上益城郡益城町田原	37×37×83	昭和初期～昭和30年 代
雁爪	ガンヅメ	八代市東陽町河俣	21.5×14×13	大正時代
田打ち車	オシガンヅメ	山鹿市鹿北町芋生	130×45.5×71	昭和31年から
油差し	アブラサシ	上益城郡嘉島町上仲 間	9×9×45	大正～昭和初期
蚊火	ヒヅト	菊池市重味	44.5×3.5×3.5	昭和56年製作
鋸鎌	ノコガワ、イネカリガ マ	玉名郡玉東町上木葉	33×13×2.5	昭和初期
鎌	カマ、コガマ	上益城郡山都町上寺	41×29×2.3	昭和初期～昭和30年 代
千歯扱	センバ	玉名市伊倉北方	85×60×63	昭和初期～昭和25年
足踏脱穀機	アシフミダツコクキ、 アシフミセンバ	宇城市豊野町下郷	72×67×65	昭和初期～昭和20年 代 愛知県豊川町共 栄社製
唐棹	ブリコ、ビャー、メグリ ボウ	宇城市松橋町北萩尾	185×15×4	昭和初期
鬼歯	オニバ、オンバ	天草市宮地岳町	134×23×16	昭和初期～
箕	ミズグルマ、スイシャ	熊本市河内町河内	65.5×73×15.5	
唐箕	トウミ	熊本市護藤町	49×104×115	
柄振	モミアセリ、モミカキ、 シロオシ	上益城郡嘉島町上仲 間	140×40×12	
篩	モミオロシ、トオシ、フ ルイ	玉名市天水町小天	56×56×11	昭和20年代
万石通	マンゴク	上益城郡益城町田原	84.3×53×125	大正7年～昭和20年代

5 家で働く

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
切斧	チュウノー オノ	菊池郡大津町高尾野	76×19.5×2.5	大正時代 刃に「佐上 明光」と刻印
山鋸	ノコ、ヒッキリノコ タ マキリノコ	菊池郡大津町高尾野	85.5×22×4.5	大正時代 刃に「登録 商標 片吉謹製」と刻 印
改良歯鋸	カイリョウバノコ、キリ コミバノコ	球磨郡五木村平瀬	98×20×4	～昭和39年 刃に「片 秀」と刻印

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
矢	ヤ	阿蘇市西湯浦	30×6×5	大正～昭和
鉦	ナタ	熊本県内	16.5×62×1.5	
鑊	カワン、ダシガン、ヤマダシガン	宇土市下網田	33×8.5×3	昭和20年代～昭和30年代
鉤	ツル	球磨郡球磨村神瀬	156×33.5×3	昭和20年代
鳶口	トビグチ	熊本市和泉町	66×9×2.2	明治～昭和
万力爪	マンリキ	上天草市松島町教良木	40×16.5×14	大正から昭和30年代
皮剥	カワハギ、カワコサギ	山鹿市鹿北町椎持	74×13.5×4.5	大正から昭和
皮剥	キノカワムキ	阿蘇市西湯浦	33.5×3×2	大正時代
削斧	ハツリヨキ、ヨッキ	宇城市豊野町山崎	155×21×3.5	
大鋸	ワキノコ、コビキノコ	球磨郡五木村栗鶴	84×59×4.5	
手斧	チョウナ	阿蘇市西湯浦	57×10×22	大正から昭和
鎌	カマ、シタカリカマ、シタバルガマ	水俣市中鶴	60×27×3	昭和初期～
造林鎌	ゾウリンガマ	天草市宮地岳町	141×14×3.5	

6 海や川で働く

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
魚伏籠	ウザ、サカナカゴ	玉名市天水町野部田	59×58×114	昭和初期
釜	ガネテボ	水俣市中鶴	42×42×36.5	
釜	ウナギテボ	玉名郡和泉町用木	12×12×59	昭和
鰻搔	ウナギカキ	宇城市不知火町松合	173×29×2	明治～
やす	ホコ	熊本市富合町田尻	139×5×2.5	
鋤簾	ヨイショ、アサリホリキ	熊本市皇口町	48×58×144	
サデ網	タビ、オシ	玉名郡和水町江田	70×95×85	
魚籠	ビキ、テボ	宇城市松橋町萩尾	27×27×25.5	昭和20年～
糸巻	タノマキ、イトマキ	玉名郡長洲町上松原	24.5×15.5×4	昭和22年～昭和40年
蛸壺	タコツボ	天草市牛深町	17×17×23	
擬餌鉤	サビキ、シャブキ	天草市牛深町	12×3×1.5	昭和10年代
擬餌鉤	ホロ	天草市牛深町	13×5×2.5	昭和10年代
餌木	エギ、ツイカトリ	天草市魚貫町	20×9×4.5	明治～
枕箱	マクラバコ、カルタ	天草市牛深町	25×15×15	昭和10年～昭和40年頃

7 ものを作る

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
石工道具		水俣市湯出		大正～昭和40年代
左官道具		玉名市和泉町蜻浦		
桶屋道具		鹿本郡植木町豊岡		

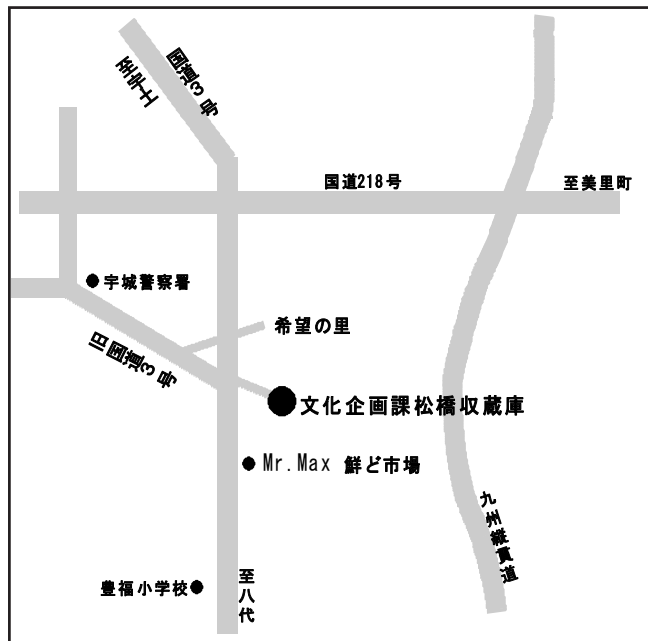
8 運ぶ・はかる

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
背負梯子	カライ、オイコ	水俣市中鶴	98×33×32.5	～昭和初期
籠	メゴ、イニャーカゴ	熊本市富合町田尻	49×50×26.5	大正時代
背負い籠	ツヅラカライ、ツヅラテゴ	水俣市古里	42×38×9	～昭和初期
畚	モッコ	上益城郡山都町北中島	65×55×2	昭和20年代
天秤棒	サス、ロクシャク、モッコボウ	上益城郡甲佐町豊内		大正～昭和
買い物籠	カイモンカゴ	八代市鏡町上鏡	29×29×28	竹製
買い物籠		福岡県福岡市	25×32×36	ビニール製
買い物籠	カイモノカゴ	熊本市新大江	21×34.5×35.5	籐製
枡	マス	合志市須屋	17×17×9.5 14.6×14.6×7 11.7×11.7×6 8.3×8.3×5.5	一升枡、五合枡、二合五勺枡、一合枡 昭和初期～昭和30年代
斗枡	トマス イットマス	熊本市小山町	35×47×18	昭和40年代まで
棹秤	チキリ サオハカリ	上益城郡甲佐町豊内	69×2×32	大正期～昭和期

9 昔の小学校

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
小学読本巻四			22×14.6×0.4	明治8年 師範学校編
小学唱歌第三編			12.7×18.3×0.9	明治18年 文部省音楽取調掛編
国語読本尋常小学校用巻三			22.3×14.8×0.8	明治33年 富山房発行
尋常小学修身書巻四			22.2×15×0.4	大正9年 文部省発行
ナツヤスミノモ			22.2×15.4×0.3	昭和8年 熊本師範学校編
冬やすみれんしゅう帖			21.5×14.8×0.1	昭和8年 熊本師範学校編
石版	セキバン	玉名市富尾	21.2×30×1.4	明治～
算盤	ソロバン	天草市牛深町	11.5×46.5×3.7	
足踏みオルガン		玉名市高瀬	96.5×39×86	昭和30年代～

[文化企画課松橋収蔵庫のご案内]



所在地：宇城市松橋町豊福 1695

電話：(0964)34-3301

Fax：(0964)34-3302

平成22年度文化企画課松橋収蔵庫第3回企画展

「ちょっと昔の暮らし探検 Ⅲ」

編集・発行 熊本県企画振興部文化企画課
熊本市水前寺6-18-1
(096)333-2155

発行日 平成22年9月10日
